実践交流
中学書写

書写の授業における年賀状の作成
～毛筆による実践～

栃木県上三川町立上三川中学校　伊澤　幸子

はじめに

学習や部活動、その他それぞれに多忙な毎日を送る中、伝統行事の一つである年賀状を授業で取り扱うことで、実生活につながるという意識をもち、意欲をもって作成するのではないか。また、自分だけではなく送付する相手を意識して書くことで、より主体的に取り組めるのではないかと考え、課題を設定した。

課題名　毛筆の年賀状を送ろう
書写の学習に対する生徒の興味、関心

書写の授業が好きであると答えた生徒は全体の七割であった。その理由として、文字のバランスがとれ、よい書作品ができるとうれしくなる、自分の文字を見直せるし上手になるのでよい、書道教室でやるよりも自由に書けるので楽しい、気持ちが落ち着くからなどがあった。中には墨の匂いが好きだからという生徒もいた。

その反面、三割の生徒が準備に手間がかかる、服が汚れる、毛筆は苦手という理由から嫌いであると答えていた。

年賀状作成についての指導計画
（三時間扱い）

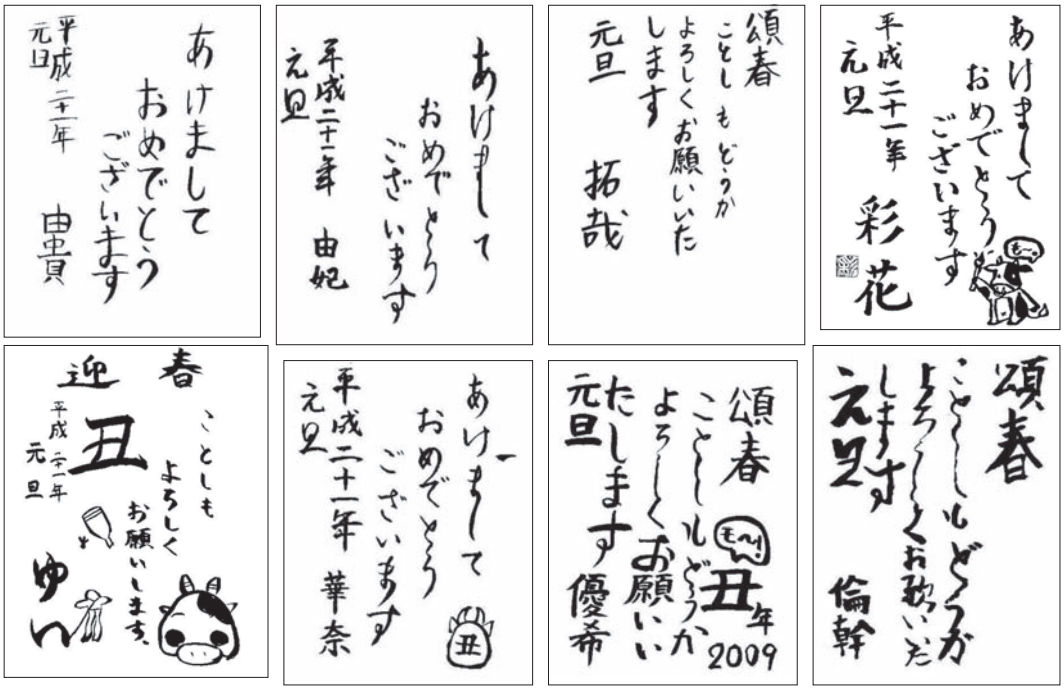
一、年賀状の書き方、資料提供、どのようなことばで、どのように書くか。
二、レイアウトを含め、選んだことばを小筆で練習する。
三、年賀状を完成し、交流する。

年賀状の資料作成について

お手本となる資料は、書写の教科書にも掲載されているが、あえて一般向けの書道雑誌『墨』より資料を選び、生徒に提供した。生徒たちは古筆といわれる仮名を目の当たりにし、ため息が漏れるような一面もあった。また、多少、背伸びをしたお手本となる書を紹介し、今まで見たこともなかった卓越した書の文字に触れ、このような素敵な文字をぜひ書いてみたいというような意欲がうかがえた。

レイアウトも含めた練習について

生徒がそれぞれに選んだ書き方とお手本を見ながら一線一線忠実に書くために、教師からの指示として、小筆の持ち方や枕腕法にして書くことで筆が真っ直ぐに立ち、筆の中心を生かした手法になること。また、連綿については多少困難もあるが、穂先を生かし、次の一画に続けて書くように心がけると、流れを止めずに書けることなどを話した。また、レイアウトについては、文字の置き方、大きさ、余白の美しさなどを話して、練習に入った。生徒は普段の書写の授業よりも黙々と練習し、静寂な空間が作られた。指導はあくまでも個別になるが、時折、近くの座席の人と交流の時間をとり、それによってさらに上達



したいと集中する生徒たちが多かった。生徒たちが一番難しく感じたのは、連綿であったようだ。穂先を生かし、緩急の流れをつけることはかなり困難だった。しかし、出来上がったときの感動はかなり大きかったようだ。

交流について

生徒たちが心を込めて仕上げた一枚、それは各担任の先生方に送る年賀状だった。それ故、いつになく真剣に精一杯取り組んだように思う。完成した年賀状は廊下に掲示し、一学年全員が見られるよう配慮した。すると、生徒たちは休み時間にじっくりと観察し、翻って自分の書はどうかという振り返りができたようだ。その後、各担任の元へ発送した。

おわりに

毛筆による年賀状の作成は楽しかった、おもしろかったと答えた生徒は全体の75％に上り、初めて毛筆で年賀状を書いたことが最大の理由だった。自分の世界観が広がった、新鮮な気持ちで取り組めたという感想もあった。また、パソコンや印刷の年賀状が多い中、心を込めて書いた一枚は、自分でもうれしく思ったなどという生徒もいた。その反面、25％の生徒が、難しく、あまり楽しくなかったと答えていることも実態としてあった。この数値に見られる生徒たちの率直な思いを、今後の指導に役立てていきたい。

学習指導要領に（2）〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の（2）に示す事項について、ア文字を正しく整えて早く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること、とある。この項目に鑑みても、この計画を立てたことは私自身の中でもよい経験になった。毛筆で年賀状を書くということが初めての経験という生徒がほとんどであり、真剣に取り組む姿勢にやりがいを感じた。また、どの生徒も数時間学んだ後の書は格段の差があり、やり続けることの大切さを実感した。今後も楽しく意欲的に取り組める授業の展開を模索していきたい。

いざわ　さちこ　継続は力なり、生徒たちの無限の可能性を信じて、ともに楽しく学んでいます。